

ポンペイ島の風景。雨水は海に注いで、たくさんの生き物たちの栄養源となる。

# Federated States of Micronesia

EARTH GALLERY Vol.122 [ミクロネシア連邦]

地球ギャラリー

写真文・道城征央 水中カメラマン・フォトジャーナリスト

こ  
み  
が  
自  
然  
を

暮らしを、脅かす



カマテップ(冠婚葬祭)の儀式では豚の丸焼きが振る舞われていた。



降水量世界第2位を記録したこともあるほど、島のどこかで必ず雨が降っている。雨水は滝となって森を潤し、海に注ぐ。



都会化されたボンベイだが、今でもカマテップの儀式は行われている。



島の中心部は都会化していて、商店も多い。



カメラをむけると気さくにポーズをとる現地の子どもたち。



上・中・下：ボンベイ島周辺の豊かな海に棲む魚たち。マンタはボンベイ島の名物だ。



太平洋に、ミクロネシア連邦に属するポンペイという島がある。ミクロネシア連邦は、チューク州、ヤップ州、コスラエ州、ポンペイ州の4州、607の島からなる国で、ポンペイはそのうちのひとつの島であり州だ。海洋性熱帯気候で雨季と乾季があるが、ポンペイの特徴は、その中でも雨が多いうところにある。私たちにとってガツカリな雨でも、自然にとっては恵みとなる。その雨水は島のあちこちに点在する滝、川を流れ、海に流れ出て栄養分となる。そのため島の周囲ではマンタがプランクトンを捕食しに集まってくる様子や、ギンガメアジなどの魚群を頻繁に見ることができ。まさにポンペイは海と山、海と森との密接なつながりを感じることでできる島だ。

もともとミクロネシアと呼ばれる地域には、19世紀から多くの日本人が南進論とともに入植してきた。ミクロネシアの人々が私たちを受け入れてくれた理由として、現地に見られる伝統的首長制という厳格な上下関係の存在が、親など家長を敬う日本社会と共通していたことが挙げられるのではないかと思う。しかし敗戦を迎えると日本人は強制退去させられ、その後アメリカによる信託統治が始まった。すると島の人たちの生活も一変してしまった。今までの自給自足の生活から、スーパーに行けば何でも手に入る生活へと変わっていったのだ。また昔のような大家族の生活から核家族化へと進んでいった。このようにアメリカ力

の便利な生活が環境を大きく変えてしまったのだ。

そのツケが昨今のごみ問題につながっていると思う。島嶼国は温暖化による海面上昇で水没の危機に瀕していると言われるが、その原因は都会化を要因とするごみ問題にあるとも言われている。かつて南太平洋にはごみという言葉は存在しなかった。なぜなら、捨てたものはすべて自然に還るときに捨てたから。しかし戦後アメリカなどが持ち込んだプラスチック製品によって島はごみで溢れるようになった。ごみという言葉のない地での、自然に還らないごみのポイ捨てはとどまることなく、そこいらに捨てられたごみは海に流れ込む。島嶼国の多くは、サンゴ礁が島を守るように囲っていたり、そのサンゴ礁の上に州島と呼ばれる島が存在していたりする。サンゴ礁は防波堤としての効果もあるのだが、捨てられたごみがそうしたサンゴ礁に負担をかけて死滅させ、やがて土地は波によって削られていく。結果、水没に至るといわけだ。

そこで私は、日頃東京で行っている清掃活動をポンペイに持ち込んだ。水没うんぬんではなくカメラマンとして、本来あつてはならないものが島の自然の中にある光景に大きな不自然さを感じたのも、清掃活動を行う理由のひとつだ。9月15日は「Clean Up Day」といって世界同時に清掃活動をする日で、現地での活動もこの日に行った。島の子どもたちにごみ問題について啓発活



動をしている麗澤大学と立命館大学の学生たちも参加してくれた。しかし私たちがどんなに力を注いでも所詮は部外者であつて、最終的には、島の人たちが解決すべき問題だ。日本人が「上から目線」で教えるようなことはしたくないので、現地の学生たちにも気軽な雰囲気に参加してくれるようにしたのだ。結果、参加人数は島の人と学生を合わせて約30名で、たった1時間で45リットルの袋で30袋分のごみを拾い集めることができた。

しかしこの活動が島の環境を良くしたり、現地の人たちの意識改革にすぐつながったりするとは思っていない。ささいなことではあるが、島の人であるとか日本人であるとかに関係なく、コミュニケーションをとって楽しみながらやっていくことの方が重要だと思っている。現にみな楽しくおしゃべりしながらやっていた。彼らの会話のなかで次につながる何かも生まれたに違いない。「楽しいからまたやろうよ」とか、効果はたつたそれだけでよいと思っっている。この次へのきっかけ作りこそが市民レベルの活動だろう。そしてこのイベントを継続させることこそ、重要だと思っっている。

#### 道城征央(みちしろまさひろ)

小笠原、沖縄そしてミクロネシア方面へ年間に何度も旅することから「南海の放浪カメラマン」の異名を持つ。自身が撮った写真を使用して「人と自然との関わり方」をテーマに、学校や企業などで幅広い講演活動を行う。また、埼玉動物海洋専門学校において「自然環境保全論」「海洋環境学」の特任講師を務めている。



左：清掃活動は、日本とミクロネシアの学生が合同で行った。中：マングローブ林では、上流から流れてきたプラスチックごみが樹木に引っかかる。右：缶やペットボトル、カップ麺の容器など自然に還らないごみが散乱する。

上：島の内部の道路脇には、廃車がそのまま放置されている。私有地がほとんどないため、たれも撤去しないままになっている。下：現地の学生も積極的にごみを拾ってくれた。